■我が国経（滑稽）21 組

吉田光弘（経・国際）

クラスの紹介

現在の御茶ノ水駅前。東京寄り改札口を出てすぐのこの辺りはたばこ屋だったはず。地下鉄も無かった

血燃え、心踊る、楽しかったあの頃は恰も映画の一コマの様だ。霞みがかった遠い昔、若かりしあの頃の我々 ――魑魅魍魎の跋扈する世間の汚濁に投げ出されてから、あまた数多くの名場面は惜しげもなく屑篭に投げ捨ててきたのに、あの頃の思いでは後生大事に我々の胸の小さなパンドラに納まっている。然し過去というには記憶には断片しか残らない。よごれ穢れたぶんだけ勝手に脚色し、改竄を繰り返し、豪華な作品として、美しい物語として我々の脳裏に再登場する。

或る友は駿河台の中庭でマイクを握りながら学費値上げ反対とーー若さと話術の巧みのあの彼は真っ赤なリップの女性を追いまわしーー僕の車は 240（あの頃若者の人気車フェアレディ Z）昼は車、夜は何？
乗り換え自由な特権階級（現在娘と嫁さんの監視下のもと謹慎中）

過去の思い出は、現在の目で,もう正確に再現不可能である、然し過ぎ去ると、大抵の事が、懐かしい。束の間の休息を求めて、人生の塵芥を洗い流すが如く、お気に入りの名場面を心の瞼より一枚一枚　印画紙に焼付けるが如く、友に披瀝し、クラスの友が一人に成るまで、思い出を胸に、今でも続く二年に一度永遠クラス会、我が国経（滑稽）21 組です。
如　露　亦　如　電　応　作　如　是　観

■惜別の駿河台

今井忠志（経・経済）

お茶の水駅の聖橋出口を出て本郷通りを皇居方面に歩くとニコライ堂が見えてくる。更に進み日本大学理工学部を越すと中央大学の正門が見えてくるはずだった。

現在は某大手損害保険会社の本社が聳え立っている。申し訳無さそうに中央大学跡地との碑が立っていた。

ここへ最近、仕事の関係で足を運ぶようになったり、子供と一緒にスポーツ用品を買いにお茶の水界隈へ来る事が増えた。

部下や子供に母校があった話をしてもピンと来ない事が読み取れる。自分が通った大学がその場所に存在しない経験を持つ事も何かの因縁なのだと思い直した。

思えば学生時代、他の大学のキャンパスにあこがれており、明るい青空の下、大きく広がる緑の芝生と落ち着いた学び舎には全く縁の無い事を知りつつ嘆いて通っていた。

あの頃、聞こえてくる歌は明るいのか、暗いのか、判らないまま可愛い顔をした女の子やギターを持って登場する長髪の歌手を皆が拍手したので自分も同調した事が懐かしい。

校舎のあった所は現在、損保会社のビルに（旧正門付近を撮影）＝写真はいずれも山下

クラスには東京出身者が少なく地方出身者が妙に多く、頻繁に話をする学生は地方出身者であった。友達は地方出身者に限るなどと感じていた。3，4 人が集まると安保問題など討論が始まり、場所を変えて話をしようと持ちあがった。東京出身者であればどこか安い飲み屋知っているはずだと言われ案内する羽目になるのであった。

全員の持ち金を確認すると、多少のばらつきはあっても殆どの者が五百円程度で唯一まともに保持していたのが自分で、それでも八百円位であった。煮込み一皿４０円のつまみしか取らせず、後は４０円で飲める酒のみ注文する。酒は合成二級酒か爆弾（焼酎）である。

社会問題なのか田舎の話なのか話題の一貫性はまるで無く、しかも五時頃から始まり十時過ぎてやっと帰宅するのである。店はカウンターのみで８人も入れば一杯となるような狭苦しいところであった。店主は我々の飲む姿を見て、残り物で良ければと言ってげそや沢庵を差し出してくれた。

長い年月が過ぎて、整った環境で屈託の無い学生生活を送るより、汚い身なりの学生に郷愁を感じてしまい、愛校心も薄く学校や社会に対し建設的な事は一切行わず 4 年間を無気力で通ったにもかかわらず、駿河台でキャンパスの無い緑色した屋根の校舎を賛美する気持ちが沸いてくる。

お茶の水駅を出てニコライ堂を過ぎると、中央大学が存在する。

こんな事が実現したら凄いだろうなと想いつつ、昔の中央大学のあった場所に聳え立つ某大手企業へ苦情処理に向かった。